緑膿菌感染による眼窩先端症候群の１例

加瀬　香　　飯塚　崇　　笠井美里
小野倫嗣　　楠　威志　　池田勝久
順天堂大学医学部付属順天堂医院　耳鼻咽喉・頭頸科

緑膿菌は自然環境中に存在する常在菌で，免疫力の低下した患者への日和見感染を起こすことで知られている．今回我々は緑膿菌が起因と考えられた眼窩先端症候群の１例を経験したので，文献的考察を含め報告する．症例は 60 歳女性．平成 22 年２月半ばころより左顔面痛出現，３月 21 日より左視力低下出現．他院脳神経外科にて鼻性視神経症が疑われ，当科へ紹介受診となった．コントロール不良の糖尿病，慢性腎不全，心臓バイパス手術の既往がある．入院時 CT では，左汎副鼻腔炎と，眼窩先端部の骨の菲薄化を認めた．左汎副鼻腔炎による眼窩先端症候群を疑い，精査加療目的に４月１日に入院となった．全身状態不良であったため，抗真菌薬治療を先行させた．４月７日局所麻酔下に両側内視鏡下副鼻腔手術を行った．術中採取した篩骨洞粘膜の病理学的検査では，薬剤感受性の高いムコイド型緑膿菌感染との結果であった．緑膿菌はムコイドを産生して菌体外へ分泌するか否かにより，ムコイド型と非ムコイド型に分けられる．感染患者から分離されるのはほとんどムコイド型であり，ムコイド型緑膿菌は分泌されたムコイドがバイオフィルムを形成し，その中で生存している菌は機械的刺激を受けず，免疫機構からも逃れやすい．また緑膿菌は，グラム陰性菌の中で特に強い薬剤抵抗性を持つ．特に多剤耐性緑膿菌は，治療に難渋することがあるため，緑膿菌を検出した場合，適切な抗生剤の選択が必要であると考える．